

2017年12月10日（日）「大工か、メシヤか」

マタイ 13:54-58

54 それから、ご自分の郷里に行って、会堂で人々を教え始められた。すると、彼らは驚いて言った。「この人は、こんな知恵と不思議な力をどこで得たのでしょうか。55 この人は大工の息子ではありませんか。彼の母親はマリヤで、彼の兄弟は、ヤコブ、ヨセフ、シモン、ユダではありませんか。56 妹たちもみな私たちといっしょにいるではありませんか。とすると、いったいこの人は、これらのものをどこから得たのでしょうか。」57 こうして、彼らはイエスにつまずいた。しかし、イエスは彼らに言われた。「預言者が尊敬されないのは、自分の郷里、家族の間だけです。」58 そして、イエスは、彼らの不信仰のゆえに、そこでは多くの奇蹟をなさらなかった。

#### 【序論】

今日もこの礼拝において、奉仕者一人一人が会衆を代表して主の御前に立っております。見えるところでも、見えないところでも、奉仕はすべて神に対してささげられるものであり、いずれも尊重されなくてはなりません。奉仕者は選ばれて神の御前に立っている器です。それと同時に、常に難しい側面があると感じますのは、奉仕者の誰もが弱さを持つ人間であるということです。時に、私たちは何らかの失敗をし、その状態で人前に立たなければならないようなことがあります。できればそれは避けたいのですが、人はどうしても生きる上で何らかの問題を抱え、失敗を免れることはできません。特に人前で語ったり祈ったりする人は、何らかの自覚的な罪を抱えていたり、人との諍いがあるような時、神に対して後ろめたい思いを抱き、また人の視線を恐れるものです。これは人前に立つようになって初めて分かる気持ちかも知れません。

私も説教を聞く立場で礼拝をささげる時がありますが、その時に説教者との関係が良好であることがとても大切だと感じてきました。思春期にこんなことがありました。日曜日の朝に牧師である父親と争い、乱れた心のまま礼拝に出席しなくてはなりません。そのような状態の時、講壇から語られる御言葉は何一つ入ってきません。むしろ、早く終わってくれとさえ思っています。神の言葉が「人の言葉」としか聞こえないのです。そして、すべてを批判的に聞いてしまう。これは礼拝者として非常に辛い状態です。恐らく、皆様も何らかそのような経験をして来られたのではないのでしょうか。それだけに、牧師の日頃からの生き方は重要なのですが、どうしたら奉仕者の人間的弱さや欠点に目を向けすぎずに礼拝に集中できるのか、ということを考えさせられてきました。

## 【本論】

### 本論 1. 凱旋的帰郷

今日の箇所は、「7つの譬話」を終えた主イエスが、弟子たちを連れて故郷へ戻られたという場面です。ここでは「弟子たちを引き連れて」ということは書かれていませんが、マルコ福音書の並行記事を読むとそうであったことが分かります（マルコ 6:1）。つまり、主イエスは「ラビ・イエス」として故郷に凱旋されたのです。「故郷へ錦を飾る」という諺がありますが、立身出世を求めて田舎を出た若者が、立派になって地元へ帰っていくという話をよく聞きます。迎える人々は、自分たちの中から有名人が出ると、誇らしい気持ちになる。「偉人」を担ぎ上げながら、自分もそれにあやかる者として、自分の価値意識を高めるのです。

しばらく前に保谷庁舎の前を通りましたら、世界卓球で活躍している森蘭選手が西東京市出身であると垂れ幕に大きく書かれているのを目にしました。私も卓球部出身ということもあり、何となく誇らしい気持ちになったものです。スキージャンプのレジェンドと言われている高梨沙羅選手も、大会で優勝するたびに地元で花火が打ち上げられるそうです。主イエスが故郷に戻られた時、村人たちはどういう心境になったのでしょうか。少なからず、「立派になったイエス」を賞賛する趣もあったと思われます。しかし、事はそう単純ではありませんでした。

**それから、ご自分の郷里に行って、会堂で人々を教え始められた。（13:54a）**

主が家を出てから故郷に戻られたのが今回で何度目であるかは、定かではありません。殆ど帰ることはなかったと思われます。ルカ 4:16-30 にもナザレの会堂での事件が書かれていますが、並行記事なのか、そうでないのか、解釈は難しいところです。この時は安息日に会堂での礼拝に出席された主イエスにイザヤ書の巻物が渡され、61章の聖句を読んで、その慰めの言葉がご自身によって成就したと語られました（4:21）。聴衆は賞賛しましたが、同時に「この人は、ヨセフの子ではないか」と言って（4:22）、主イエスの権威について論じ始める。すると、主イエスは「預言者はだれでも、郷里では歓迎されません」と言って（4:24）、異邦人の従順とイスラエルの不従順とを対比して語られる。そこから、人々の心境に激変が起こり、主は町の外に追い出され、崖から突き落とされそうになるのです（4:29）。

多くの点で今日の記事と似ていますが、同一であるかどうかは分かりません。仮に同じ出来事だったとしますと、事態はかなり深刻であり、マタイの著し方は大分緩やかだということになります。

## 本論 2. 主イエスを人間的つながりだけで見ると

「この人は、こんな知恵と不思議な力をどこで得たのでしょうか。この人は大工の息子ではありませんか。彼の母親はマリヤで、彼の兄弟は、ヤコブ、ヨセフ、シモン、ユダではありませんか。妹たちもみな私たちといっしょにいるではありませんか。とすると、いったいこの人は、これらのものをどこから得たのでしょうか。」(13:54b-56)

主イエスの語る言葉を聞き、行なわれる不思議な御業を見た人々は、仰天しました。彼らは確かにそれを見聞きし、一種の感動を覚えたのです。そして、イエスに対するただならぬ関心が集まります。ところが、誰かが言い出したのでしょうか。「この男は元々ただの大工じゃねえか」と。確かに、主イエスは元々大工であったようです。マルコ 6:3 では「この人は大工ではないか」という言い方がなされている。父親のヨセフが大工であり、主は手伝いながら成長し、そして自らもナザレで様々な注文を受けて働いて来られたと思われま

す。当時の「大工」は、木工だけでなく、石工、金属細工なども行ない、工具作りから家の建設まで幅広く作業をしていたようです。これは高度な技術を持ち、精巧な作業ができなくてはならない仕事です。ゆえに、「大工」と呼ばれることそのものが蔑みの表現とは言い切れません。しかし、ここでの文脈、主イエスが御言葉を語った時に「あいつは大工だ」と言われるようになりますと、少々話は違ってきます。村人にとっては、イエスはかつて仕事を依頼した作業員に過ぎなかった。しかし、その男がここにきていっばしに聖書を解き明かし、ルカによれば自分を「慰め主」とさえ呼んでいるのです。彼らにとって、このギャップはまったく理解できないことでした。学者の家系に生まれた人がラビになるのは分かる。しかし、大工の小倅が何を生意気に！という、「上に立たれたくない男」としての見方が先立ってしまったのでしょうか。

私は年に二回多摩ニュータウンキリスト教会で説教奉仕をさせていただいています。私にとっては生まれ故郷であり、自分の育った教会であるため、やはり特別な思いがあります。私が赤ちゃんの時から知っている人たちを前にして語る時、いつも感じることは、皆さんがどこか私の父親の面影を私の中に見ているということです。「修武先生に似てきた」と言われるのは別に嫌なことではありませんが、私にとっては「父親」という壁がここでは依然として立ちはだかっているように感じる瞬間でもあります。今は独自のアイデンティティで、父親の真似事ではないメッセージをしていたとしても、どうしても昔から関わりのある人々にとっては「喜樹ちゃん」「よっちゃん」「ヨンボ」であり続けるのでしょうか。それはそれで嬉しいことなのですが。

ただ、主イエスと私を同じに考えることはできません。主イエスは神の子であり、礼

拝されるべきお方なのです。しかし、ナザレ村の人々の目は、イエスとの人間的つながりに囚われ続けていた。それが真理を覆ってしまう。見るべきものが見えなくなってしまふ。救いを見出せない状態にしてしまったのです。

主イエスの親、兄弟、姉妹のことが出てきますが、一つ引っかかる表現があります。「彼の母親はマリヤ」という言い方です。通常、当時のユダヤ社会では父親の名前を冠せられて呼ばれました。それを敢えて母親の名前と結びつけて呼ぶところに、主イエスに対する軽蔑的ニュアンスを読み取ることができます。ナザレの人々にとって、イエスという男は父親の分からない私生児だったのです。マリヤが聖霊によって身ごもったということを、人々は信じていなかった。どこかの誰かとの姦淫によって生まれたという噂は未だに人々の間に根付いていたのです。このような人間的な先入観が邪魔をして、真理に目が閉ざされてしまうのは残念なことです。

### 本論3. 礼拝において受ける恵みの大きさの差異

**こうして、彼らはイエスにつまずいた。しかし、イエスは彼らに言われた。「預言者が尊敬されないのは、自分の郷里、家族の間だけです。」そして、イエスは、彼らの不信仰のゆえに、そこでは多くの奇蹟をなさらなかった。(13:57-58)**

今日の箇所には繰り返して出てくる「郷里」(πατρίς)という言葉には、「祖国」「父の国」という意味があります。このことは、主イエスの帰郷が、もっと広い意味で「イスラエルに神の子が来られたこと」を表しているように思えてなりません。神はご自分の民のところに御子を遣わされた。ところが、彼らはそれがどなたであるかが分からなかった。

**すべての人を照らすそのまことの光が世に来ようとしていた。この方はもともと世におられ、世はこの方によって造られたのに、世はこの方を知らなかった。この方はご自分のくにに來られたのに、ご自分の民は受け入れなかった。(ヨハネ1:9-11)**

選びの民イスラエルが、自分たちの救い主を見分けることができなかったのです。そして、十字架へと追いやってしまった。このことは更に広がり、人類全体がメシヤを拒んだということを言い表しているでしょう。その一人に私がいる。皆さんがいる。

このように言われてもピンと来ない方もいらっしゃるかも知れません。自分はキリストを拒んだことなどないし、十字架に送ったこともないと。しかし、今日の箇所は、私たちの中に潜む「神の言葉」を受け入れられなくする性質を抉り出しているとは言えないでしょうか。今日の冒頭で、私が父親との関係が悪い時にまったく御言葉が入ってこなくなった経験をお話ししました。これは一面致し方ないことのように見えるのですが、この時に私と神様との間を隔てる何かがあったことは確かです。神への奉仕者を「今朝

やり合った親父」としてしか見るこののできない自分。その語られる言葉を「うるさい」とさえ感じてしまった自分がいました。

レベルは違いますが、ナザレの人々も主イエスに対してどこか共通した感情を抱いたのではないのでしょうか。古い先入観が彼らの目を覆い、主イエスが何者であるかを悟らせないようにした。そして、もはやそれ以上主の御業を見ることはできませんでした。58 節は「そして、イエスは、彼らの不信仰のゆえに、そこでは多くの奇蹟をなさらなかった」という言葉で締め括られています。これは残念な記録です。主が人々の信仰に応じて御業をなさるのであれば、主はそこに信仰を見出されなかったということになります。主イエスと共に生活をした人々。共に成長した兄弟、姉妹。近くにいればよいということではありません。逆に、遠く離れた異邦人が福音を受け入れるということもあります。主イエスの御言葉を身近に聞いていながら、実は聞いていなかったということがあり得るのです。

#### 【結論】

私たちは自分の中にある「御言葉を撥ね退ける性質」に気をつけなくてはなりません。御言葉が聞けなくなると、福音が分からなくなります。福音が分からなくなるということは、自分の救いが見えなくなるということです。私たちがいつも聖霊によって整えられながら主の御前に出られるよう、祈ろうではありませんか。へりくだった心が与えられ、御言葉が迫ってくるように。閉ざされた心が開かれ、信仰をもって主イエスご自身を受け入れることができるように。どんな時にも主イエスにしっかりと目を向けていることができるように。一回一回の礼拝で最大限の恵みにあずかることができるように。

#### 【祈り】

神の子であられるイエス様。私たちは、御言葉を聞くこと自体が非常に困難になる時があります。それは、人間的な思いに支配されていたり、世の誘惑に心を奪われている時かも知れません。主イエスに対する畏れが薄らいでいるようなこともあります。主よ、どうか私たちの心に潜む妨げを取り除いて下さり、主を礼拝することに集中させて下さい。賛美を真実なものとして下さい。喜びをもって仕えさせて下さい。私たちが生涯に亘って真の礼拝者であることができますように。

## 【祝祷】

仰ぎ願わくは、

ご自分の民を愛し、その救いのために、御子を世に送り給うた、父なる神の愛。

あらゆる人に福音を宣べ伝え、最も身近な人々にも目を向け給うた、主イエス・キリストの恵み。

人間的な動機による妨げを取り除き、常に真の礼拝者となし給う、聖霊の親しき交わりが、

あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。